

2020. 11. 08 第二主日礼拝

使徒の働き 10:34-43 「神が開く新時代を見つめる」

聖書

- 34 そこで、ペテロは口を開いてこう言った。「これで私は、はっきり分かりました。神はえこひいきをする方ではなく、
- 35 どこの国の人であっても、神を恐れ、正義を行う人は、神に受け入れられます。
- 36 神は、イスラエルの子らにみことばを送り、イエス・キリストによって平和の福音を宣べ伝えられました。このイエス・キリストはすべての人の主です。
- 37 あなたがたは、ヨハネが宣べ伝えたバプテスマの後、ガリラヤから始まって、ユダヤ全土に起こった事柄をご存じです。
- 38 それは、ナザレのイエスのことです。神はこのイエスに聖霊と力によって油を注がれました。イエスは巡り歩いて良いわざを行い、悪魔に虐げられている人たちをみな癒やされました。それは神がイエスとともにおられたからです。
- 39 私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムで行われた、すべてのことの証人です。人々はこのイエスを木にかけて殺しましたが、
- 40 神はこの方を三日目によみがえらせ、現れさせてくださいました。
- 41 民全体にではなく、神によって前もって選ばれた証人である私たちに現れたのです。私たちは、イエスが死者の中からよみがえられた後、一緒に食べたり飲んだりしました。
- 42 そしてイエスは、ご自分が、生きている者と死んだ者のさばき主として神が定めた方であることを、人々に宣べ伝え、証しするように、私たちに命じられました。
- 43 預言者たちもみなイエスについて、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しが受けられると、証ししています。」

はじめに

9月29日、30日の二日間に亘り、日本福音同盟（JEA）の宣教フォーラムがリモートで行われました。会議のテーマはコロナ禍にあって教会が抱える課題と可能性についてでした。二日目に行われた主題講演の中で講師が語った「コロナ禍は神からの強制リセット」ということばが心に残りました。今まで集まって礼拝をささげることが当たり前だったのが、急に人と人とが関わることに制限が加えられ、教会活動もその影響を受けました。新型コロナウイルスによって社会の仕組みや日常生活まで変化を余儀なくされました。講師が言いたかったことは、神さまが新型コロナウイルスを用いたということではなく、新型コロナウイルスによる様々な影響を通して社会や教会に何らかのメッセージを発信しているという意味です。これまで当たり前に思っていたことに対して、神さまがそのあり方にストップをかけたのです。「神からの強制リセット」ということばを聞いたとき私は思いました。神さまが閉じたのなら、神さまが次の扉を開かれるのだと。そうならば、神さまが開かれる次のステージに私たちはついて行かなければならないということです。なぜなら、教会またはクリスチャンは、いつの時代も神さまが開かれる扉の向こうに信仰を持ってついて来たからです。扉の向こうに踏み出すのか、それとも留まるのか、信仰が試されてきたのです。その信仰のチャレンジに応えた者だけが神さまの開かれる新しいステージの恵みを受け取ることができるのです。

今日の礼拝は福音がユダヤ人から異邦人に拡大されていくきっかけとなった出来事に目を向けます。旧約から新約へと舞台が移り変わる中に、今のコロナ禍の教会を重ねてみたいと思います。

1. 神は歴史の転換点に働かれる

私たちは歴史の中に生きていますので、過去の歴史から学ぶことは大切です。今、皆さんと聖書通読で読んでいる箇所は旧約のⅡ歴代誌です。Ⅱ歴代

誌の1~9章はイスラエルの第3代の王ソロモンについてです。ソロモンは父ダビデの後を継いで、ダビデの願いであった神殿をエルサレムに建設します。神さまはソロモンに知恵と富をお与えになったのでその神殿は非常に荘厳で立派なものでした。神殿はイスラエル民族の宗教的シンボルとなり、礼拝がささげられるようになったのです。ダビデまでの時代の礼拝は幕屋を中心とした礼拝でした。それが神殿という定まった場所での礼拝に変わったのです。これは礼拝形式から見た時に大きな転換でした。

その後、残念なことにソロモンの後は国が北王国と南王国に分裂をしてしまいます。詳細は省きますが、北王国はアッシリア帝国に、南王国は新バビロニア帝国に滅ぼされてしまいます。神殿のあったエルサレムは破壊され、バビロン捕囚の憂き目に遭います。このときイスラエルの民は、バビロンで神さまを礼拝することを始めたのです。かつてはエルサレム神殿で礼拝をささげていたのが、今捕囚となった民はそこにシナゴグと呼ばれる会堂を作り、そこで礼拝をささげるようになったのです。神殿から会堂に礼拝のスタイルが移行しました。この形が今の私たちがささげている教会堂での礼拝の形を作ったのです。

幕屋から神殿へ、神殿から会堂へ。時にバビロン捕囚という痛みを通して、神さまは常に歴史の中で新しい時代にふさわしく礼拝の場を開いて来られたのです。今ここで神さまが一つの在り方に幕を下ろされたとするなら、次の幕が上がることに期待しようではありませんか。今私たちがしなければいけないことは、次の幕が上がるための準備をするということではないでしょうか。それは何も大それたことを計画するという意味ではありません。自分の将来への備えであつたり、教会の将来を展望することであつたり、身近なところから、次を展望することではないかと思うのです。

2. ペテロの幻、ユダヤ人から異邦人へ

さて、ユダヤ人であったペテロが異邦人に向けて福音を届けるようになって

た経緯が使徒 10 章です。カイサリアにローマの百人隊長であるコルネリウスという人がいました。この人は「彼は敬虔な人で、家族全員とともに神を恐れ、民に多くの施しをし、いつも神に祈りをささげていた」（使徒 10:2）とあります。コルネリウスは幻で、「ペテロと呼ばれるシモンという人を招きなさい」（使徒 10:5）と語られ、ペテロの下に使いの者を送ります。時を同じくしてペテロも幻を見ます。天から風呂敷のような入れ物が降りて来て、「ペテロよ、立ち上がり、屠（ほふ）って食べなさい」（使徒 10:13）という声がありました。しかしペテロはそれを拒みます。なぜなら入れ物の中には、あらゆる四つ足の動物、地を這うもの、空の鳥が入っていたからです。これらは旧約の規定（律法）では汚れた動物であり食することは禁じられていたからです。保守的なユダヤ人キリスト者であるペテロにとって、律法を破ることはできなかったわけです。躊躇するペテロに神さまは「神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない」（使徒 10:15）と戒めます。こんなことが 3 回もあったのです。

ペテロが幻を見た直後に、コルネリウスからの使いがやって来て、事の次第を話しました。そこでペテロは自分が見た幻の意味を悟るのです。神さまはペテロの持っていた旧約的価値観を強制的にリセットされ、新約にふさわしい在り方を示されたのです。ペテロははっきりと主イエスさまはすべての人の主であることを確信したのです。「これで私は、はっきり分かりました。神はえこひいきをする方ではなく、どこの国の人であっても、神を恐れ、正義を行う人は、神に受け入れられます。神は、イスラエルの子らにみことばを送り、イエス・キリストによって平和の福音を宣傳伝えられました。このイエス・キリストはすべての人の主です」（34-36 節）。

ペテロは最初「主よ、そんなことはできません」と拒否をしますが、この反応は自然です。人は今自分の持っている文化や習慣、または思考や感情を優先するものであり、それを変えることを嫌います。変化を好まないのです。現状維持で満足していますから、新しいことが目の前に突き付けられると即

座に拒否します。そこで拒否し続けたらその先はありませんが、ペテロは受け入れました。よくペテロはこれを受け入れることができたものだと感じます。しかしその背後にはコルネリウスの登場という周到な神さまの根回しがあったのです。福音が「ユダヤ人から異邦人へ」という流れは神さまの歴史の中で必然のことだったからです。私たちの身の回りで起こっている事からをこのような視点から見てみたらどうでしょうか。開かれる扉の向こうがどのようなものなのかは分からなくても、確かに神さまは私たち一人一人の人生に、または教会の歴史に次なる展開を用意してくださっているという信仰に立って歩むことができたなら、将来に希望を持てるのではないのでしょうか。クリスチャンの希望の根拠は、目の前の現実や自分が思い描いた将来ではなく、神さまにあるのです。今がどんなに困難で閉塞感に満ちていても、神さまは必ず扉を開いてくださるという信仰に私たちが立てるかどうかがです。その意味でコロナ禍は私たちの信仰の実質が問われているのです。

3. すべての人の主

ペテロが幻から学んだことを私たちも学ばせていただきます。神さまがペテロに示したかったことの中には「神はえこひいきする方ではなく、どこの国の人であっても、神に受け入れられ、イエス・キリストはすべての人の主」(34-36 節)であるということです。イエス・キリストはイスラエルの神、すなわちユダヤ人の神であると共に異邦人にとっても「私の神」であることをはっきりと示されたのです。神さまの恵みから漏れる人は一人もいないということであり、恵みの中心である救いはキリストにあってすべての人に道は開かれているということです。

ペテロがイエスさまのことを話していると、話を聞いていた人たちの上に聖霊が下りました。その様子を見たユダヤ人キリスト者は「異邦人にも聖霊の賜物が注がれたことに驚いた」(45 節)のです。そして、「この人たちが水でバプテスマを受けるのを、だれが妨げることができるでしょうか。私たちと同じように聖霊を受けたのですから」(47 節)と言い、洗礼の喜びに与っ

たのです。イエスさまの救いから漏れる人は一人もいないことを伝えて行きたいと思います。今学んでいる伝道セミナーはそのためにも有益です。イエスさまの恵みを届けるために、私たち自身が変わっていかねばならないのかもしれませんが。私たち自身が変わること、それがもしかしたら神さまが開かれる新しい扉なのではないでしょうか。変えられていく自分に期待し、その先に開かれていく救いの扉をみんなで開けて行きたいと願っています。

まとめ

今日のメッセージに「神が開く新時代を見つめる」という題をつけました。新時代とは、私たち自身が変えられていくことであり、その結果開かれていく福音宣教の拡大です。まずは私たち自身が神さまに喜ばれる者へと変えられていくことを求めましょう。それが新しい時代の第一歩のような気がします。神さまと共に歩む人生を喜び、楽しみ、証することができたら、その先に多くの人の救いを見せてくださるでしょう。Doing (行い) よりも being (あり方) を大切に、クリスチャン生涯を楽しんで行きましょう。